

三浦古尋録

かとう・さんじゅ

作者:加藤山寿(生没年不詳)

成立:文化9年(1812)



解題

Keyword

- 三浦郡
- 竜崎攀鯉
- 私撰地誌
- 池子村

江戸時代後期に地元の文人が著した相模国三浦郡の地誌。三浦半島全域の地誌としては最も古い。

■ 成立と諸本

作者・加藤山寿の自序から文化9年(1812)に最初の原稿が成立したものとみられる。現在までに端本を含めて10種類以上の写本の存在が知られているが、原本は伝わっていない。成立とその後の経過も不明な点が多い。横須賀市図書館(1967年当時の名称)発行の『校訂三浦古尋録』は本書の唯一の活字翻刻本であるが、その解説によれば、諸本は、加藤山寿自身の手になる文化10年のもの(山寿本)と、後に竜崎攀鯉(りゅうざき・はんり)が補筆・改訂した文化14年のもの(攀鯉本)の2系統があるという。そして山寿本として内閣文庫本(明治8年写)、国立国会図書館本、東京教育大学(現・筑波大学)本などを、攀鯉本として内閣文庫別本(竜崎攀鯉補訂)、神奈川県立図書館本、同県立金沢文庫本などを挙げ、それぞれ簡単な解説を付している。『校訂三浦古尋録』は内閣文庫本(明治8年写)を底本として、諸本8種と校合を行い、異同を注記したものである。なお、上記の県立図書館本は中巻を欠き、上下計37丁の端本であるが、天保12年(1841)竜崎攀鯉筆の跋文が本書の由来を記している。

■ 作者

原著者・加藤山寿は西浦賀村(現・横須賀市西浦賀町)の人で、名は勇助(または雄助)、生没年や詳しい伝記は不明である。文化2年(1805)家事を息子に譲り、郊外に隠居して文筆に専念したという。『三浦古尋録』のほか

『漂客雑記』『西国観音記』等、6点の著作を残したことが記録されている。補訂者・竜崎攀鯉は大津村池田(現・横須賀市池田町)の人、名は明美、号はほかに戒珠など。宝暦13年(1763)に生まれ、嘉永2年(1849)まで長寿を保ち、『新編三浦往来』などの著作がある。二人の関係は、一部の本の序文や跋文に、山寿の没後に攀鯉がその志を引き継いで補訂したとも、あるいは執筆段階から互いに協力していたとも記述されているが、詳しい事情は不明である。

■ 内 容

諸本の異同がかなり多いので、ここでは『校訂三浦古尋録』により内閣文庫本(明治8年写)の内容を紹介する。同書は3巻本で、上巻68丁、中巻65丁、下巻90丁から成り、主に海岸風景を描いた挿絵17葉を収録する。巻頭に加藤山寿の自序、竜崎攀鯉の序「三浦之大意」が置かれ、三浦の名木・名井・名産、三浦氏系図など総論的部分がある。本文は村単位で記述され、上巻は三浦郡東部(主に現・横須賀市東部)14か村、中巻は西部(同、横須賀市西部、逗子市、葉山町)24か村、下巻は南部(同、横須賀市南部、三浦市)37か村を収録する。各村については領主・戸数・石高がまず記され、社寺・史跡・伝説等を解説し、碑文・縁起・古文書等が引用されることもある。記述はおおむね簡略であるが、衣笠城・新井城・和田合戦など史書にもとづき詳しい歴史が書かれている事項もある。全体として、私撰地誌ながら、後の『新編相模風土記稿』の先駆ともいえる内容をもっている。なお、『新編相模風土記稿』(#23)では事情により項目だけで本文を欠く池子村についても記述されている。



史料本文を読む

<写本>

- 『三浦古尋録』 2冊 1841(天保12)跋 [K291.3/21]

<翻刻本>

- 『校訂三浦古尋録』 菊池武・小林弘明・高橋恭一校訂 横須賀市図書館 1967 [K291.3/15]



史料についてさらに知る－参考文献－

- ◆ 「三浦古尋録解説」(『校訂三浦古尋録』 菊池武・小林弘明・高橋恭一校訂 横須賀市図書館 1967 [K291.3/15])
- ◆ 山内和子「三浦古尋録について:写本の伝来に関する考察」(『三浦古文化』(2)京浜急行電鉄㈱ 三浦古文化研究会 1967 [K20.3/2])